

第 11 回市史講座ミニレポート：令和 2 年 2 月 15 日（土）

松江の水道敷設と水環境

大矢幸雄先生（松江市史絵図・地図部会長）



はじめに大矢先生は、どの歴史書を見ても江戸時代と明治時代が途切れたように書かれておりつながりが分かりにくい、江戸と明治をつなぐものがこの水道ではないか、と話されました。

松江市は「水郷松江」「水につけた城下町」といわれますが、城下町が形成された当初より、飲用水は少なかったそうです。江戸・仙台・金沢・水戸などでは大規模な上水道工事が行われ、また、多くの城下町が飲用の水源地近くに形成されているのに対し、松江は明治 20 年頃でも戸数 8500 戸のうち 1 割程度しか飲み水の出る井戸がなかったそうです。たいていの井戸水は金気を含み、宍道湖は汽水湖のため塩分を含んでおり、ろ過しても飲めるものではありませんでした。そこで松江には古くから水売りがいたそうです。

松江で上水道整備の機運が高まったのは明治 10 年以降、コレラが大流行してからでした。特に明治 12 年と 19 年には大流行し、明治 12 年の流行時には全国の患者数は約 16 万人、死者は約 10 万人に上り、死亡率は 6 割以上という大変なものでした。当

時の主な交通手段は船だったため、島根県内でも港のある場所では感染者が多く、松江も例外ではありませんでした。現代のような情報網のない中、人々は人夫が棺桶を担いで火葬場へと向かう姿を見て情報を得ており、恐怖から神仏信仰へ走ったそうです。

コレラ対策のため、明治 12 年には「中央衛生会」、明治 16 年には「日本私立衛生会」が設置されました。松江でも家や居住地の消毒、堀川利用の禁止、隔離施設や公衆便所の設置、飲用水の配布などが行われました。その後、何度も流行するコレラなどの伝染病予防のため、明治 26 年 4 月、私立衛生会島根支部会頭の田中知邦は松江市長福岡世徳に上水道敷設の要望書を提出しました。その計画では、水源は大海崎の“目無し水”、給水人口は 3 万 5 千人、費用 1 万 6 千円とされました。当時の松江市の収入が 1 万円であったことから実現はそう難しくないと言われ、市民の要望は高まりましたが、水道管の配置の偏っていることと使用中の井戸を補完する計画だったことから、福岡市長は内務省から技師を招聘し、松江市域に水道がいきわたる計画を立てようとしていました。

明治 26 年 6 月、内務省技師の関屋忠正が松江を訪れ事前調査を行い、7 月にはウィリアム・バルトンが同技師高橋辰次郎とともに再調査を行いました。その際の調査報告書『衛生事項並ニ右改良方法ニ関スル復命書』によると、水源は東忌部のサミズ、給水人口は 5 万人、浄水池は旧松江城址などとされましたが、工費が 15 万円以上と高額のため、計画は一度とん挫します。その後、水道敷設によらない方法で飲用水を賄おうとしますが、計画は不成功に終わります。結局、松江市が水道敷設の決意表明を行ったのは、明治 45 年 7 月、高橋義比市長の時でした。

水道敷設は、バルトン案を元に水道博士中島鋭治の立てた計画が採用されました。浄水池は旧城址から床几山へ変更となり、費用は 63 万円とさらに高額になりましたが、人口増と鉄道敷設により発展が見込まれたため、2 年半の工期で事業がスタートしました。実際には 5 年かかりましたが、今日のようにショベルカーなど機械のない時代、時には大雪の中、全ての作業が人力で行われました。こうして完成した上水道でしたが、給水人口の増加や、水道管が通る松江大橋への大型船追突事故、大火の際に水圧が低下したことなどから、当初から拡張・整備工事を繰り返しています。

松江市の水道事業推進に貢献した人々は以上のように、福岡世徳、バルトン、関屋忠正、高橋辰次郎、田野俊貞医師、田中知邦ら
がいました。彼らは自分の信念のもと、松江市の発展や水道敷設、感染症予防と衛生知識の普及のために尽力しました。大矢先生
は、松江の水道事業は彼らの滅私奉公に支えられて進められてきた、と締めくくられました。